

谷口功一『日本の水商売 法哲学者、夜の街を歩く』PHP研究所、2023年にもとづき報告する。

法哲学者が「夜の街をめぐる旅」の記録と記憶を綴るノンフィクション。ホメロス・後鳥羽上皇からニーチェ・サンデルまでを参照しながら、スナック・ラウンジ・クラブ・バーなど「夜の公共圏」としての水商売の社会的意義を浮き彫りにする。

「日々、何の変哲もない営業を続ける自営業者たちこそがデモクラシーの担い手である」  
(著者)。

ウイルスと風説で汚された独立起業家・労働者の誇りを取り戻し、自由とコミュニティ再生への道を照らす一冊。

第1章：狙われた街・すすきの（北海道札幌市）

第2章：弘前、クラスター騒動の真実（青森県弘前市）

第3章：いわき、非英雄的起業家の奮闘（福島県いわき市）

第4章：夜の庭としての武蔵新城（神奈川県川崎市）

第5章：甲府という桃源郷（山梨県甲府市）

第6章：小倉で戦争を想う（福岡県北九州市）

第7章：雲伯、神々の国と鬼太郎のまち（鳥取県米子市・境港市、島根県松江市）

第8章：別府の盛り場を支える「ちはら三代」（大分県別府市）

第9章：浜松、「検証と反省」に思いを馳せて（静岡県浜松市）

第10章：十勝のスナックと地域のつながり（北海道新得町・帯広市）

第11章：「東京右半分」であふれる商売の熱量（東京都北区赤羽・荒川区西尾久）

第12章：小さなオデュッセウスの帰還（東京都渋谷区・中央区銀座）

終章：「夜の街」の憲法論

（Amazonの書籍紹介より）